

第6章 産業構造

W23-0195A 山本譲

概要

この章では、「産業構造」の変化によって起こる経済発展、そしてそこから生まれる相互関係に着目していき、産業構造が与える一国経済への影響、国際間の取引形態についても考えていく。

1 産業構造の変化と経済成長

〈ペティの発見〉(1960年)

- ・ 1人あたりの所得の違いは、「産業構造」の違いによるものである。
- ・ 農業 < 工業 < 商業

〈クラークの発見〉(1940)

- ・ ペティの法則を再発見 ← 『経済進歩の諸条件』
- ・ 「産業構造」と「経済発展」との関係を取り上げる。

⇒ 経済発展に伴い、就業構成のウエイトが

第1次産業 → 第2次産業 → 第3次産業 へと移っていく。

〈チェネリーの分析〉

- ・ 100カ国以上のクロスセクションデータを用い、産業構造・所得水準・人口規模の関係を計測。

農業 GDP シェア → 急速に減衰
工業 GDP シェア → 急速に拡大



発展途上国にとって発展の初期の段階で起こる重要な変化。

☆変化を引き起こす要因☆

1. 農耕間の不均等な成長
2. 需要構造の変化
3. 人工の変化
4. 各産業における財やサービスの投入要素の代替
5. 労働や資本といった要素価格の変化

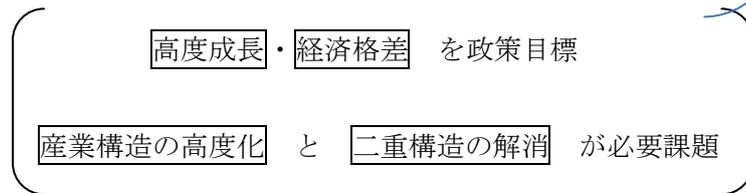
※最も重要

☆経済的進歩の側面☆

- ・生産の増加
- ・生産技術の進歩
- ・**産業構造の変化**
- ・資本蓄積
- ・国際経済関係の進歩
- ・需要構造の変化
- ・制度的進歩
- ・価値観の変化

♪経済の発展♪ → ♪分業化♪ → ♪有機的な結びつき♪
→ ♪各産業の生産も増大♪ → ♪全体も増大♪

〈日本の高度経済成長までのながれ〉



日本は西欧に比べ
GNP が低かった

1970年代 石油危機

➡ 産業構造の更なる高度化を再議論

1980年代 日本の産業調整は顕著に進展

⇒貿易構造の変化、対外直接投資の活性化



省エネルギー・代替エネルギー への転換

2 産業連関分析

○目的 … 国民経済の構造を各産業の生産技術と、それに基づく
産業間の投入と産出の連関関係を実証的に分析するため。

★再生産表式 … マルクスが展開した経済循環を表す図式。
毎年同量が生産される場合を単純再生産、
前年より生産量が増える生産性を拡大再生産という。

☆一般均衡論☆…経済を互いに依存関係にある市場の集まりとして捉え、それらの市場の一般均衡の状態を分析する理論。(ワルラス)

☆産業連関表☆…1年間に1国の各産業部門にどのように生産要素が投入され、生産された生産物・サービスが各産業部門及び消費・政府・輸出部門にどのように配分されたかを見るための表。
(レオンチェフ)

☆産業連関論☆…〈一般性を求める理論的推理〉
〈経験的事実を集めること〉

体系的に統合!!

〈採取経済〉

⇒自然の恵みから衣食住に関わるモノを自由に手に入れることのできる社会。



労働は消費に見合った分だけで十分である。

〈農耕経済〉

採取経済に限界が訪れ、必要な量の衣食住を工夫して手に入れなければならない社会

・大きな問題 → 人口増加

〈産業経済〉

・社会全体の生産性の向上 → 生産の分業化

・農業の生産性の上昇 → 人口の増加を解決。

↓ 農業以外(工業)の生産活動に人口が投入できる。

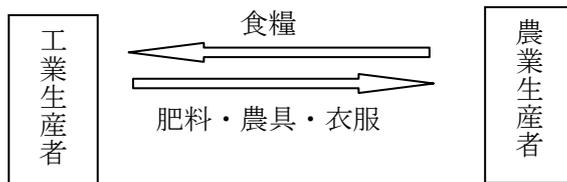
・生産技術の進歩 ・品種改良 ・肥料の導入 ・農器具や輸送器具の生産
⇒生産性が上がるにつれて分業化が進む。→より専門的になる。



労働の投入だけでなく、他産業の生産物の投入が必要となってくる。



生産活動の相互依存が始まり、交換が行われ始める。



<高度産業経済>

- ・サービス部門の成立で、現在の経済の原型を構成

<簡単な産業連関モデル>

$X = \text{農業生産}$ $x = \text{種子投入}$ $C = \text{消費}$ $I = \text{貯蓄}$

生産と需要の関係の関係式 $X = x + C + I$

需要から生産を求める関係式 $X = 1/1-a(C+I)$

<1960年代のアジアの国際産業構造>

- ・1963年「国際産業連関表モデル」を作成。
⇒アジア経済研究所が、日本・アメリカ・EECを連結し、国際間の取引へ拡大した産業連関表。

(結果)

化学製品・金属第一次製品・繊維製品・紙製品・金属製品・一般機械

}	輸出振興型	… 日本・アメリカ
	輸入依存型	… 韓国・台湾・フィリピン

<1970年以降のアジア太平洋地域の国際産業構造>

ASEAN (東南アジア諸国連合) 同盟

⇒工業化を中心とする経済開発計画を発表。



輸入代替政策・輸出代替政策・輸出主導政策

★1973~74年 第1次石油危機★

- ・石油産出国 → 工業化のための投資と外国資本の導入を可能に。
- ・石油輸入国 → エネルギー不足と国際収支の悪化。

むすび

経済発展とともに、交易を通じて、地域の経済から一国の経済、一国の経済から国際間の経済へと発展し、産業構造も国際的な関係の中でいっそう複雑な相互依存関係を構築していくことがレオンチェフらの手法によって明らかになった。

そしてこれから、国際産業連関表の作成とそれをベースとした実証的分析は21世紀の国際産業構造を展望する上で重要な分野といえる。